

## マタイによる福音書5章17-48節 「天の御父に倣う者」

### 1A 律法と預言者の成就 17-20

### 2A 律法学者とパリサイ派にまさる義 21-48

#### 1B 十戒において 21-37

1C 殺してはならない 21-26

2C 姦淫してはならない 27-32

3C 偽りの誓い(偽証)をしてはならない 33-37

#### 2B 悪に対して 38-48

1C 無・復讐 38-42

2C 敵への愛 43-48

## 本文

マタイによる福音書5章を開いてください、17 節から見て行きます。私たちは、天の御国の福音について見えています。イエス様が、悔い改めなさい、天の御国が近づいたと言われて、それで悪霊を追い出し、あらゆる患いや病を治され、それで大勢の人々がついて来ました。そして山から、そうすかかつてイスラエルに主はシナイの荒野にある山から語られましたが、ガリラヤ湖周辺の山から語られ、天におられる神が王となって支配する、御国とはいったいどのようなものかをお語りになられているのです。

イエス様は初めて、八つの幸いについて語られました。初めが心の貧しい者です。悔い改めなさいという言葉にも含まれていることです。王なる神、そしてキリストをそのまま見た者には、私はもう駄目だという絶望感が襲います。それから、悲しむ者です。自分に絶望した者は悲しみます、自分の罪を悲しみます。それから柔和な者です、悲しむ者にはその霊にへりくだりが与えられます。相手から何かをされても、自分は敢えて主張しません。そして、自分自身に義がないことを悟っているので、ここから神の義を求めます。義に飢え渴く者は幸いです。さらに、自分に義は無いことを知っており、神のみが正しく、裁かれる方なので、他者を憐れむことができます。憐れむ者は幸いです。そして、神を王とするからこそ、自分たちの間にある壁が壊れます。平和の絆で結ばれます。平和を造る者は幸いですね。それから、この世における態度に移ります。このように神の義に生きる時に、世は迫害します。けれども、それも幸いなのだよとイエス様は言われます。

そしてそのようにして、迫害や困難に耐え忍びつついる時に、私たちは地の塩となることができます。世が腐敗していくのを抑える、防腐剤のような働きをします。また、世に対して光となることができます。罪悪や不正がある中で、その悪を明るみに出し、人々が悔い改め、光であられる神に近づくことができます。世に対してその悪が広がるのを抑え、さらにその悪から救い出される人々が起こされ

るということです。

### **1A 律法と預言者の成就 17-20**

では、この教えが旧約聖書にある神の教えと一つなのか？という疑問に、イエス様が答えるのが17節以降です。

17 わたしが律法や預言者を廃棄するために来た、と思っはなりません。廃棄するためではなく成就するために来たのです。18 まことに、あなたがたに言います。天地が消え去るまで、律法の一点一画も決して消え去ることはありません。すべてが実現します。

律法においても、預言者においても、イエス様がお語りになられている天の御国の姿がしっかりとありました。旧約聖書においても、心へりくだる者、悔い改める者、平和を造る者、義のゆえに迫害される者たちこそが、神の相続者となっていきました。そして、イエス様は、モーセの律法によって示されていた神の義を、実現し、完成させるために来られたのです。「律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからです。(ヨハネ 1:17)」そして、私たち人間は自分たちの考えで、どこかを取り除いて、あるいは付け足して、都合を付けようとします。例えば、「旧約は恐ろしい神であるが、新約は愛の神だ」と、あたかも神が二人いるかのように語りますが、イエス様はその考えを粉碎されます。一点一画も、決して消え去ることはないのです。

19 ですから、これらの戒めの最も小さいものを一つでも破り、また破るように人々に教える者は、天の御国で最も小さい者と呼ばれます。しかし、それを行い、また行うように教える者は天の御国で偉大な者と呼ばれます。20 わたしはあなたがたに言います。あなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません。

午前礼拝でも話しましたが、律法と恵みは矛盾しません。神の戒めを、ここでイエス様が言われるように、どんな小さいものでもそれを守るという姿勢があつてこそ、神の恵みが生きて働くのです。言い方を変えれば、神の恵みを知つてこそ初めて、神の喜ばれるように歩むことができます。その反面、パリサイ派や律法学者の教えているような義は、神の恵みを知るのに妨げになります。それが、ここでイエス様の言われている「律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の御国に入れません」であります。

### **2A 律法学者とパリサイ派にまさる義 21-48**

そこで、イエス様は、彼らの教えていることを取り上げ、それから、「しかし、わたしはあなたがたに言います。」と言われて、彼らの教えていることと対比させます。そして、神が教えておられることの真髄、真意を教えられます。

1B 十戒において 21-37

1C 殺してはならない 21-26

21 昔の人々に対して、『殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。

「昔の人々に対して」とありますね。イエス様が、パリサイ派の人たちが教えていたことを、昔の人々に対して教えられたことと説明しております。それは、一般のユダヤ人がトーラ、すなわち律法そのものを見て、それを読んでいる訳ではなかったからです。バビロンから帰還したユダヤ人が、律法を大切に保つために、その解釈を行い始めました。口伝律法と言いますが、後に編纂されてミシュナと呼ぶようになります。イエス様が、例えば安息日においてパリサイ人から、安息日を破っていると非難されるのは、律法そのものではなく、そうした口伝律法に違反していたからです。

そして、イエス様は、「殺してはならない」という戒めについて語られます。次に「姦淫してはならない」と語られます。それから、「偽りの誓いを立ててはならない」ということを語られます。これらは、十戒の後半部分に関わるものです。殺してはならない、姦淫してはならない、それから、偽りの誓いですが、偽りの証言をしてはならないということです。主は、シナイ山で神の与えられた教えに対して、その真髄を語られます。そして初めの、「殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない」に対して、イエス様が語られます。

22 しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に対して怒る者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に『ばか者』と言う者は最高法院でさばかれます。『愚か者』と言う者は火の燃えるゲヘナに投げ込まれます。

パリサイ人と律法学者は、「殺してはならない」というものを、物理的に殺してはならないということの解釈に留めていました。しかし、イエス様はそこに神の真意があるのではないと強く言われます。人殺しをする欲望、怒りから人殺しが始まっているのだと言われます。ヤコブが言いました、「欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。(1:15)」心にある欲が外の行いに出るのだから、その欲望を心に孕ませている段階で、すでに神の教えを破っているのです。しかし、すでにここから神の恵みが始まっています。つまり、自分の心を変えていただかない限り、また自分そのものが問題だということ悟らない限り、外の行いを変えようとしてもそれはできないのだ、と悟るところから福音が始まるのです。

全てのことについて、怒ることそのものが間違っているわけではありません。神ご自身が怒りを持っておられました。イエス様ご自身も怒られたことがあります。そして聖書に出て来る敬虔な者たちにも、怒りが出てきます。けれども、その時は必ず神の栄誉が傷つけられているとか、他の人が傷つけられているということであり、それでやるせない怒りと言いますか、悲しみを伴った怒りと言いますか、

利他的な愛から来ている怒りがあります。しかしこの怒りは、自己に向っています。自分が傷つけられたというところにある、鬱積した思いです。

そして、「ばか者」「愚か者」というのは、「頭が空っぽ」であったり、「価値がない」という意味です。生きるに値しない者というこことであり、いわゆる「死ぬ」と相手に言い放つ時の言葉であります。しかも、それを「兄弟」について使っています。同じ父から出た者たち、同族の者たち、あるいは霊的に、信仰において兄弟であると言っていいです。自分がその人とつながっており、その人が痛めば自分も痛み、その人が喜ばば、自分も喜ぶ。そうした共同体の中にいる仲間であります。そういった仲間意識を忘れて、「いなくなれば良いのに」と思ったら、それは人殺しをしているとイエス様が断じておられます。

そして、怒る者また罵る者は神に裁かれるのですが、「最高法院」というのは、サンヘドリンのことです。そこにはユダヤ人指導者が集まり、霊的な事柄について裁きを行います。この者が、神の前で罪に定められるということです。イエス様も、ここでユダヤ人に裁かれて罪ある者とされました。それから、「ゲヘナ」は、ヒノムの谷から来ています。ヒノムの谷は、エルサレムの西から南に走っている谷です。ユダ王国の末期、生まれてきた子を火にくぐらせるという忌まわしいことを行っていました。そして、ヨシヤ王がそこを汚す、つまり焼却所にして、灰捨て場にしました。そして、そこはごみの焼却所にもなり、また処刑された罪人の死体や、埋葬されなかった人体を埋める場所にもなりました。悪臭を放ち、蛆がわき、そして火と煙が絶えずありました。イエス様は、神によって永遠に裁かれるところを、その姿を取って「ゲヘナ」と呼ばれたのです。

ですから、パリサイ派と律法学者、またその教えを聞いている多くのユダヤ人は、自分たちは殺人の罪を犯していないから天の御国に入れるという安心がありました。しかしイエス様は、そんなものではない、怒り、兄弟を蔑ろにした時点でそれで神に裁かれるのだと断じておられるのです。

23 ですから、祭壇の上にささげ物を献げようとしているときに、兄弟が自分を恨んでいることを思い出したなら、24 ささげ物はそこに、祭壇の前に置き、行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから戻って、そのささげ物を献げなさい。

ここでイエス様は、置かれている状況を変えておられます。私たちが、自分のことが傷つけられてそれで相手をばか者というということを話されましたが、自分が傷ついた、躓いたことはよく話すのですが、その割には、「自分が躓かせている」ということについては気にしません。それは、自分中心だからです。しかし、自分が躓きを受けたということ以上に、人に躓きを与えたということが焦点にならないといけないのです。

「祭壇の上にささげ物を献げようとしている」というのは、牛や羊などのいけにえを神殿の祭壇のと

ころまで携えて行くことです。そこで、自分自身が兄弟に恨まれていることを思い出します。そうしたら、「急がば回れ」であります。神への礼拝を捧げる最短の近道は、兄弟との和解なのだとということです。イエス様が後に、律法をまとめて、神を愛し、そして隣人を愛することを言われましたが、神への愛と、隣人への愛、また兄弟への愛は一对であり、つながっています。隣人との関係を正すということによって、まことの礼拝を捧げることができます。旧約の預言者も、まことの断食というのは、憐れみの行いをする事なのだと書いていました(例:イザヤ 58:9-10)。

25 あなたを訴える人とは、一緒に行く途中で早く和解しなさい。そうでないと、訴える人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれることになります。26 まことに、あなたに言います。最後の「一コドラント」を支払うまで、そこから決して出ることはできません。

23-24 節が同胞のユダヤ人との不仲を取り上げておられるのに対して、こちらはローマ社会での訴訟について、イエス様は語っておられます。自分を恨み、そして訴えている人がいるのであれば、和解することを第一に考えなさいと主は言われます。そしてローマ社会には、苛酷な制度がありました。借金をして返済しないと、牢獄に入れられることがありました。それから奴隷として働かされたり、そのまま牢獄の中に入れられたままにされていたりしました。「一コドラント」というのは、非常に小さな貨幣単位で、一円みたいなものです。全て返済しなければ、そこから出られないということです。これは苛酷なことでありますが、ユダヤ人たちはローマ社会に生きていましたから、現実の問題であったのです。

イエス様がここで強調されているのは、怒りや苦み、恨み、不仲、敵対心などが、どれだけ私たちに大きな災いをもたらすかということであり、軽々しく考えがちですが、大きな災いをもたらすのだと警告しておられるのです。「無慈悲(苦み)、憤り、怒り、怒号、ののしりなど、一切の悪意とともに、すべて捨て去りなさい。(エペソ 4:31)」

### 2C 姦淫してはならない 27-32

27『姦淫してはならない』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。28 しかし、わたしはあなたがたに言います。情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです。

「姦淫」という意味、その定義は、「結婚している者が、自分の配偶者以外の者と性関係を持つこと。」であります。モーセの律法において、姦淫の罪は厳しく罰せられました、見つければ死刑です(申命 22:22)。事実、ダビデはその罰を受ける寸前まで来ました。バテ・シェバと姦淫の罪を犯し、その夫ウリヤを殺したことで、ダビデは、「私は主の前に罪ある者です。」と告白したので、ナタンは、「主も、あなたの罪を取り去ってくださった。あなたは死なない。(2サムエル 12:13)」死なないという宣言を受けたのは、つまりは罪が赦さなければ死刑だったということです。

そしてパリサイ派の人たちは、このことを厳しく守っていました。姦淫の現場を見つけた時に、その女をイエス様のところに連れて行きましたが、石打ちにするつもりでした。けれども、イエス様はもっと厳しかったのです。彼らは姦淫を、肉体関係のみのこととして解釈していました。しかしイエス様は、心にある姦淫、すなわち女を見て、情欲を抱いているのであれば、それで既に姦淫を犯したと言われるのです。主が姦淫してはならないと語られた時に、情欲というものまでも含むのだということです。ですから、姦淫の現場で女を捕らえた男たちは、イエス様から、「罪を犯していない者から、初めに石を投げなさい」と言われた時に、心の中では分かっていた、自分がやましいことを考えたことがあり、姦淫の罪を心で犯していることに気づいたのかもしれない。

ところで、ここの「見る」というのは、「見える」ということではありません。しばしば見る、気を留めるという意味になっています。見えてしまって反応するというのを、イエス様は話しておられるのではありません。その後で、自分の意志を使って見続けるという意味があります。ルターが言いましたが、「あなたの頭に鳥が飛んでいるのを止めさせることはできないが、自分の髪に巣を作らせるのは、やめさせることはできる。」

29もし右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに投げ込まれないほうがよいのです。30もし右の手があなたをつまづかせるなら、切って捨てなさい。からだの一部を失っても、全身がゲヘナに落ちないほうがよいのです。

使徒ヨハネが、世の愛とは何かということで、第一の手紙で、「目の欲」また「肉の欲」と言っています。目に入ってくるものから貪りが起こり、また自分の体から起こっているものから貪りが起こります。その目、また手を出すことによる行動、これによって自分を躓かせているのであれば、その部分を切り取ってしまいなさいとイエス様は言われています。旧約聖書の中で、厳しい裁きの中に、手足を切り取ることもありました(例:2サムエル4:12)。目を抉り出すことも、サムソンがペリシテ人から行われたり、ゼデキヤ王がバビロンによって目をえぐり取られたりしていたので、決して珍しいことではなかったはずですが。イエス様は、それだけの厳しい対処をしてでも、姦淫の罪から免れなければいけないと言われています。

ここで、文字通りこのことを行なえということではないことに気を付けたいと思います。なぜなら、右目を抉り出しても、左目が残っていますから、情欲を心に抱くことはできます。右の手を切り取っても、左の手で出来ます。私たちが考えるべきは次のことです。「目を抉り出されるということが、いかにひどいものかを容易に想像できる。私たちがその光景に気分を害すのと同じぐらい、情欲をもてあそんでいることを、忌まわしいことだと思っているか？」後者は、何か大したことのないように捉えてしまいが、前者と同じぐらいの衝撃なのだということです。そしてイエス様は、ゲヘナについて語っておられます。自分の優先順位が、しっかり正しいものになっているかどうかを確かめないといけません。31 また『妻を離縁する者は離縁状を与えよ』と言われていました。32 しかし、わたしはあなたがたに

言います。だれでも、淫らな行い以外の理由で自分の妻を離縁する者は、妻に姦淫を犯させることになります。また、離縁された女と結婚すれば、姦淫を犯すことになるのです。

姦淫することに関連して、イエス様が離縁すること、離婚について教えておられます。マタイ 19 章において、離婚についての教えをイエス様がもっと詳しく行われます。ここで、パリサイ派の者たちが教えていたのは、申命記 24 章 1 節のもので、彼らはこれをもって妻を離縁させること、そして他の女を妻にすることを由としていました。けれども、モーセはどのように言っていたのでしょうか？「申命 24:1-4 人が妻をめぐって、夫となった後で、もし、妻に何か恥すべきことを見つけたために、気に入らなくなり、離縁状を書いてその女の手に渡し、彼女を家から去らせ、そして彼女が家を出て行って、ほかの人の妻となり、さらに次の夫も彼女をきらい、離縁状を書いて彼女の手渡し、彼女を家から去らせた場合、あるいは、彼女を妻とした、あとの夫が死んだ場合には、彼女を去らせた初めの夫は、彼女が汚された後に再び彼女を自分の妻とすることはできない。」これは、結論から言いますと、女がもてあそばれるのを防ぐための、妻の権利を保護するためのものです。

しかし、後世においてなぜか、離縁状を出せば離縁することができることとされました。そしてユダヤ教のラビによって、申命記 24 章における離縁状を出す条件として「恥すべきこと」というのが、解釈が変わりました。ヒレル派は緩やかであり、「お前の作る飯はまずい」というのも「恥すべきこと」として、離縁状を書ける条件にしました。けれども、シャマイ派は恥すべき事というのは、不貞です。イエス様は、不貞のほう、「淫らな行い」の解釈を取っておられます。そして思い出せますか、イエス様の父ヨセフは、マリヤがイエス様を身ごもったことを知った時に、内密に離縁させようとしたが、まさに申命記 24 章に基づいてのことでした。石打ちにされることから、彼女を守ろうとしたのです。

イエス様の離婚についての教えは、19 章に入った時にじっくりと見て行きたいですが、ここでは離縁する動機をイエス様が決り出しておられる点を指摘したいと思います。一言、「他の女が気に入ったから」ということです。不倫、つまり姦淫をしたいので、離縁状というものによって、離婚ということによって他の女、あるいは男に移ろうとするその心であります。姦淫の心を、律法を適当に解釈することで覆い隠すことさえできるのです。

### 3C 偽りの誓い(偽証)をしてはならない 33-37

33 また、昔の人々に対して、『偽って誓ってはならない。あなたが誓ったことを主に果たせ』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。34 しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。天にかけて誓ってはいけません。そこは神の御座だからです。35 地にかけて誓ってはいけません。そこは神の足台だからです。エルサレムにかけて誓ってはいけません。そこは偉大な王の都だからです。36 自分の頭にかけて誓ってはいけません。あなたは髪の毛一本さえ白くも黒くもできないのですから。37 あなたがたの言うことばは、『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』としなさい。それ以上のことは悪い者から出ているのです。

「偽りの誓い」であります。十戒の偽りの証言をしてはならないことに関わりますが、レビ記 19 章 12 節にこうあります。「あなたがたは、わたしの名によって偽って誓ってはならない。そのようにして、あなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。」誓いを立てたら、それを必ず果たさなければいけません。そして神の御名によって誓うのであれば、十戒の「みだりに、神の御名を唱えてはならない。」という戒めもあり、重大な罪になります。それで、誓いをしたならば、それを必ず主に果たささいというように、パリサイ派は教えていました。

一見、実に真っ当な解釈ですね。ところが、イエス様は吠えます。「しかし、わたしはあなたがたに言います。決して誓ってはいけません。」まるで反対のことを言っていますね。これを表面的に読んではいけません。そのまま読み進めればよいのですが、最後に、「『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』としなさい。」とされています。イエス様は、彼ら誓いが頻繁に、偽ったものであり、いかに虚しくなっているかをご存じだったからです。そして彼らが、誓いを果たさなくとも誓うことができるように、姑息な解釈を加えていたのです。それが、ここにある三つです。「天にかけて誓うこと」「地にかけて誓うこと」それから、「エルサレムにかけて誓うこと」です。神の名を使っていませんね、だからそれを果たさなくとも、主の御名にかけて誓っているのではないのです。こういった姑息な手段で、誓いを軽々しくできるようにしていたので、イエス様は、「そんなことを辞めなさい」と言われています。そして、天にしても、地にしても、エルサレムにしても、すべて神に関わっているものであり、神の名によって誓っているのと同じ事だということです。

そして、そもそも誓いをする目的は、主の前でこれこれのことを行なうということですから、「『はい』は『はい』、『いいえ』は『いいえ』」という、返答をそのまま行うことによって果たされるということです。自分が本気で決めていない、行なっていないのに、それらしく動くところに偽りがあり、偽善があります。そうではなく、行うべきことを行い、それに合わせて言葉を使うというぐらいにしていかなければいけないということです。

## 2B 悪に対して 38-48

このようにして、十戒に関わるパリサイ人の義の基準を取り上げましたが、イエス様は次に、悪に対して、敵に対しての態度を語られます。

## 1C 無・復讐 38-42

38『目には目を、歯には歯を』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。

この言葉は有名になっていますね、出エジプト記にある律法です。「しかし、重大な傷害があれば、いのちにはいのち、目には目を、歯には歯を、手には手を、足には足を、火傷には火傷を、傷には傷を、打ち傷には打ち傷をもって償わなければならない。(21:23-25)」ここでモーセによって、主が語られているのは、裁き司に対するものです。司法的な判断であります。公正な判断を守るために、復讐

心による過度の刑罰を抑えるものでありました。人はとかく、目が打たれも、相手の命を奪いたくなります。二倍、三倍、四倍にして仕返ししたいと思うものです。それを抑えるために、裁き司が持っている尺度として、主が語られたものです。

しかし、当時のパリサイ人はこれを、個人的な復讐に当てはめていました。つまり、自分が何か仕打ちを受けたら、その分、仕返ししてよいという解釈を行っていたのです。しかし、天の御国において、神の国において仕返しというのは、誰がするものでしょうか？主ご自身が行われることです。時に、主は裁きの器として人を用いられることがあります。イスラエルを躓かせたミデヤン人をことごとく殺しましたが、それは復讐ではなく、主の怒りを現わすためでした。主がご自分の正しいことを示すためであり、神の栄誉のためにそのことを行なわれるのであり、イスラエルの民は自分が傷を受けたから仕返しをするということは、してはならないことでした。ヤコブが、息子レビとシメオンが、自分の妹が凌辱されたことで、仕返しに虐殺したことについて、それを厳しくとらえていたことを思い出してください。そして、何よりもダビデがサウルに手を下さなかったことを思い出してください。彼は、敵への復讐を主に対して祈りましたが、自分の手で復讐を下すことはありませんでした。ですから、パリサイ人の解釈は、律法の意図から離れていたのです。

39 しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい。40 あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着も取らせなさい。41 あなたに一ミリオン行くように強いる者がいれば、一緒に二ミリオン行きなさい。42 求める者には与えなさい。借りようとする者に背を向けてはいけません。

ここに、キリストの弟子たちの生き方の真骨頂に入っていきます。何をもちてキリスト者なのか？イエス様ご自身が、十字架への道を辿られる時に、「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。(16:24)」と言われました。ユダヤ時にとって、ローマの十字架ほど屈辱的なものはなかったはずですが、しかし、そのローマの主権の背後に、神ご自身の主権があり、神に服するがゆえにローマの権威にも、ご自身は服されました。このイエス様の道に従っている私たちです。

「悪い者に手向かってはいけません」というイエス様の言葉ほど、誤用されている言葉はありません。これを「無抵抗」とであると教えるのです。これは、「無抵抗」ではなく、「無・復讐」と言い換えてみたいと思います。あるいは、「自ら、愛をもって、自分の当然の権利を捨てる。自己中心的な思いを捨てる。」と言ってよいでしょう。しかし、悪い者に手向かっていけないという言葉、最もひどいのは、国家権力に対して使うことです。国の軍隊に対して、警察に対して、その他の武器使用に対していけないと声を上げることです。まずもって、イエス様ご自身についてきている弟子たちに語られた言葉を、どうしてイエス様を知らない人に当てはめるのでしょうか？先に説明したように司法には、人を罰する力が与えられているし、ローマ13章には上の権威は剣を帯びていて、それは悪を罰するため

あることが書かれています。このことばを乱用しているために、キリスト者が悪に抵抗することが誤っている、不道徳のように教えることがあります。このために、例えば家庭内暴力を受けている人が警察に通報することをためらったりします。いいえ、本当に夫に対して愛があるのであれば、彼が自分のしていることが何なのかを悟る必要があるのです。ですから、警察を呼ばなければいけません。正義を行使することは、手向かうことではないのです。

イエス様がここで語られているのは、無抵抗ではなく、仕返したい復讐心を捨てることです。そして、自分の権利を敢えて、相手のこと、神の栄誉のゆえに捨てること、証しを立てることにその自由を使うことであります。まず、「あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい。」とあります。これは、中東においては最もひどい侮辱の一つです。相手を平手で打つことは、私たちが考えること以上に相手を卑しめることです。そこで、私たちの衝動は頬を打たれたら、打ち返すことであります。やり返したいと思います。けれども、それを敢えて捨てるということです。むしろそのような仕打ちを受けても、復讐しない態度を見せ、かえって親切にするのであれば、相手は驚きますね。そこまで、人々が自分たちと私たちの違いに気づくかどうか？なのです。

思い出すのが、韓国にいる元脱北者の方の証しです。彼女は、中国側に逃げて、そこで働いていました。けれども、同じ会社に韓国からの人もいました。その雇い主である中国の人からひどい扱いを受けていました。けれども、彼女はその韓国の人がクリスチャンで、その雇い主のために祈りを捧げているのを見ていました。酷い仕打ちを受けているのに、主人が祝福されるように祈るとは何なんだろう？と思ったそうです。彼女は神というものは、作り話だと思っていたのですが、これは本物だ、この神は生きているかもしれないと思うようになったのです。

そして、「あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着も取らせなさい。」と主は言われます。出エジプト記にある質物についての教えがあります。上着を取ってはいけないという定めです(22:26-27)。ここで「下着」とありますが、私たちの知っている肌着ではなく、普通の服のことです。そして上着が、一番上に羽織るものです。つまり、ここでイエス様が言われているのは、「法的に権利があっても、それに固執しない」ということです。自分に与えられている権利は、神から与えられた尊い賜物です。けれども、賜物であって、当然のことではありません。けれども、私たちはしばしば、権利に固執し、そればかりを主張することがあります。けれども、イエス様が敢えて十字架を背負われたように、私たちは愛のゆえに、権利を主張しないこともできるのです。そして、人々はそれを見て、驚きます。なんだこの人は？と思い、神に、キリストに引き寄せられるのです。

そして、「あなたに一ミリオン行くように強いる者がいれば、一緒に二ミリオン行きなさい。」ですが、下着のことについてはユダヤの律法ですが、こちらはローマの法律です。ローマは、荷物の運搬を、人を徴用して運ばせることができました。兵士は、民に一ミリオン行くように強いることができます。1.5キ。です。シメオンが、イエス様の十字架を担ぐように命じられて、ゴルゴダまで担いだことを思

い出してください。その時に、「一緒にニミリオン行きなさい」とイエス様は言われます。ここでイエス様が教えておられるのは、「要求されていることだけを、行えばよい」というところから、一歩出ることです。人は、自分の気に食わない法令があれば、それをなるべく避け、やらないことを求めます。ごまかすこともあるでしょう。けれども、敢えてそれを行う、喜んでそれを守る姿を見せることによって、驚かれるのです。昔の中国の話ですが、ある地方政府で税として米を納めさせていたそうです。多くが、そこに石ころや藁が入るようにして重さを誤魔化していたのですが、教会の人々、クリスチャンたちはきちんと納めました。「教会の者たちの持ってくるものは、信頼できる」となったのです。

### 2C 敵への愛 43-48

43『あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め』と言われていたのを、あなたがたは聞いています。44しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。

パリサイ人たちの教えですが、まず、「あなたの隣人を愛し」なさいというのですが、これはレビ記から来ています。「19:18 あなたは復讐してはならない。あなたの民の人々に恨みを抱いてはならない。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは主である。」この言葉をもって、パリサイ人は、同族の民を愛しなさい、自分の仲間は愛しなさいとしました。そして、「敵を憎め」ことではありますが、これは表面上、イスラエルに敵対した者たちに対して神が裁きを行われていること、またダビデが詩篇で敵に対する呪いを願って祈っていることなど、そうした表面的なところを取って、勝手に当てはめたのだと思われます。つまり、「仲間は愛し合いなさい、けれども外の間、敵対する者には敵対しなさい。」ということです。これによって、ユダヤ人たちの間には異邦人やローマに対する敵対心が生まれていました。異邦人は敵対してよし、そしてローマには抵抗してよし、となったのです。それで、税を納めることは律法にかなっているのかどうか、というような詰問をイエス様に吹っかけたのです。

しかし、イエス様は、「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」と言われます。仲間以外の人どころか、敵のためにも祈りなさいと言われていました。そして、古い写本によれば、もっと詳しく書いてあります。「自分の敵を愛し、ののしる者を祝福しなさい。自分を憎む者に善を行い、自分を酷く扱い、迫害する者のために祈りなさい。」となっています。ここでもまた、神の正義を求めないということではないし、不正を喜ぶことではないということです。イエス様も、不正な裁判において、ご自身のためではなく、ユダヤ人の裁判に不正があることに批判をしました。パウロも、ピリピにいた時に不当に鞭打たれた時に、役人に対してローマ市民であることを告げました。これは、正しいことをきちんと守らせる、つまり相手の益になることにもなるわけで、善を行なっています。

しかし、明らかにキリストにつく者であるということで、反対し、無視し、蔑み、迫害もすることがあります。その時に、その人たちの救いのため、その霊的祝福のために祈るということは、強力な証しです。ここで大事なのは、「敵」とイエス様が言われていることです。私たちは、敵を敵ではないとしがち、

自分の信仰にとって敵があるのだということを受け入れることは必要なのです。何が敵であるか自体も、認めてはいけないというような空気があれば、そこには愛が生まれません。それは一つの価値観かもしれません。イスラム教の国であれば、イスラム教の教えはサタンのようなものであることを、彼らは知っています。共産主義が無神論であり、反キリスト的であることを知っています。しかし、それを信奉している人々を愛し、受け入れ、その人々と共にいることを望みます。このようにして、私たちは自分たちだけで固まらず、外に出て、しかも敵対的であると思われる所にも出て行き、そこでキリストの証しを立てることができるということです。

45天におられるあなたがたの父の子どもになるためです。父はご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからです。

イエス様が敵を愛しなさいと言われる根拠が、「天におられるあなたがたの父の子どもになるため」であります。イエス様は山上の垂訓において、天の御国における王なる神を、父であると紹介しておられます。神の国において、神はもちろん王ですが、その王子になることができるというのが、福音であります。キリストの弟子たちは御国を受け継ぎますが、そこに多くの分け前が王子として存在します。そこで、王を愛する父と呼ぶのです。そこで、父なる神、自分たちは神の子供であるけれども、そこに必要なのは、倣うこと、真似することです。また従うこと、従順になることもあるでしょう。

そして、父なる神は何をしておられるかと言いますと、「ご自分の太陽を悪人にも善人にも昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」ということであります。主が、同じように良くしてくださっているのだから、あなたもそうしなさい、悪人だからといって恵みを示すことを控えるのはよしなさいと言われていています。これを一般恩寵と呼びますが、たとえ聖書を知らなくとも、神が一般に人々に恵みを与えておられるということです。

46 自分を愛してくれる人を愛したとしても、あなたがたに何の報いがあるでしょうか。取税人でも同じことをしているではありませんか。47 また、自分の兄弟にだけあいさつしたとしても、どれだけまさったことをしたことになるでしょうか。異邦人でも同じことをしているではありませんか。

イエス様は、隣人だけを愛して、外側の敵を憎めということであれば、パリサイ派が嫌がっている者たち、つまり、取税人や異邦人でも同じことをしているではないか？と問いかけておられます。自分たちが見下している者たちでさえ、あなたがたと同じようにしているのだよと、パリサイ派のプライドを壊すような形で言われています。

敵を愛すると言う時、私たちは相手からの反応で動いていません。全てを神に明け渡している状態になっており、神によって動いています。つまり、自分が何かひどい仕打ちを受けたとか、「自己」に対する意識が薄いです。被害者意識ではなく、自分を客観視しています。そして、自分に敵対する

相手をも客観視しています。自分に何をしたかではなく、神がその人をどう見ておられるかということで相手を見ます。キリストによって愛されている人々なのだから、ということで、自分に何をしてきても、自分のことは気にせず、相手に善を行なうのです。相手に左右されないで、神に反応している姿です。

48 ですから、あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい。

ついに出てきました。この言葉を聞けば、もはや自分では何もできないことに気づくでしょう。この「完全」という言葉は、「到達する、終着点」という意味合いがあります。つまり、十分に成熟したという意味です。天の父は、十分に成熟した方だということです。父なる神がそうであるならば、その子供である、王子である私たちも十分に成熟したものになりなさいと言っているのです。そうですね、敵を愛するという事は、十分に成熟したものができるとです。何か悪い仕打ちをしてきた者に、何かやり返したいというのは、子供じみたこと、未熟であります。しかし、何かひどいことをしていても、大人の事情と言いますか、そこに気前の良さ、大らかさと余裕、そして何よりも憐れみがあります。その中で、その人のかえって憐れみ、善を行なうことができるのです。天の御父にならっていくということ、これは驚くべきことですが、聖霊の働きによって招かれています。